

パラグアイにおける初等教育及び算数教育について

アスンシオン日本人学校 教諭 角 直浩

キーワード：【パラグアイの教育事情】【算数教育】【パラグアイの児童の算数に対する意識調査と自尊感情】

1 はじめに

南米パラグアイの首都に位置するアスンシオン日本人学校での3年間、現地教育理解の調査研究のため、現地の国立校、私立校へ積極的に赴き、主に算数の授業参観や、各種アンケートの実施、分析により、パラグアイの教育の実態を把握するように努めてきた。視察した学校は7校で、その内訳として国立校4校（アスンシオン市近郊2校、アトゥラ市2校）、私立校3校（ニホンガッコウ、カンポベルデ、パンアメリカンスクール）である。首都圏の国立学校、地方の国立学校、施設設備等が充実している首都圏の私立校と、それぞれ違う環境の学校を視察することで、パラグアイの全体的な教育の実態を垣間見ることができた。

パラグアイの教育環境は、南米の中でもそのレベルは低く問題点が多くある。教育予算の低さや教員の質、学校数の不足、校舎等の倒壊、貧困などによる就学率の低下などが挙げられる。しかし、学校で学ぶ児童はとてもポジティブであり、学校での生活を楽しんでいる様子が、実際に視察した際に交流した児童の姿やアンケート等からうかがえた。

この報告では、パラグアイの教育事情、算数教育の実態、学校で学ぶ児童の様子などについての調査研究を通して考察していく。

2 パラグアイの教育制度

(1) 就学前教育 1年間

(2) 初等教育 9年間（義務教育）

※3期に分かれている。1期：1年生～3年生 2期：4年生～6年生 3期：7年生～9年生

(3) 中等教育 3年間

(4) 高等教育 4～6年間

（日本国外務省 HP より http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/04latinamerica/infoC42500.html）

3 パラグアイの教育事情

(1) 教育予算

パラグアイの2015年度の国家予算で、教育予算は対GDP比で4.28%にとどまり南米の主な6か国の中で最低となっている。（アルゼンチン6.63%、ボリビア5.85%、ブラジル5.55%、チリ4.69%、ウルグアイ4.44%）（<https://www.nodal.am/2017/06/paraguay-pais-menor-gasto-social-la-region-segun-informe-la-cep/>）

(2) 教員の賃金

パラグアイの小学校教員の平均年間所得は、6,166ドルで、南米諸国の中で最下位に位置する。

（チリ15,305ドル、アルゼンチン10,339ドル、エクアドル9,804ドル、ブラジル8,375ドル、コロンビア7,128ドル ペルー6,761ドル）

（<https://www.5dias.com.py/paraguay-entre-los-que-menos-paga-a-maestros/>）

（Paraguay Business News No.80）

(3) 学校の校舎の状態

地元新聞社（abc）によると、2016年2月から8月までに以下のような事案が発生したと伝えている。

- ・ 2 月 20 日： コロネル・オビエド県“Nuestra Señora del Asunción”校で教室の屋根が一部倒壊。
夏休みのため、負傷者無し。市役所等に改修依頼中だが、未だ倒壊のまま。
- ・ 4 月 26 日： アスンシオン市“Nuestra Señora del Asunción”校で、一棟の屋根全壊。
立入禁止にしていたので、負傷者無し。新学棟の建設を検討、実現していない。
- ・ 5 月 6 日： アスンシオン市“ María Felicidad González”校で屋根の一部倒壊。
教室に幼稚園児がいたが、隅で遊んでいたため無事。
- ・ 5 月 11 日： サン・コスメ・イ・ダミアン地区“Padre Adriano Formoso”校で屋根の一部崩壊。負傷者無し。
- ・ 6 月 22 日： キインドゥ地区“ Bernardo Ayala Vázquez”校で屋根が一部崩壊。負傷者無し。
- ・ 6 月 30 日： サン・ペドロ県ヘネラル・レスキン地区の学校で屋根が一部崩壊。3 教室を立入禁止にした。
- ・ 8 月 2 日： コルディジェラ県ピリベプイ市タベ・グアス地区“Virginia Ayala de González”校で、教室横の渡り廊下が一部崩壊。学生5 名が負傷。
- ・ 8 月 5 日： サンベルナルディーノ市ウブハンガイ・セグンダ地区“Defensores del Chaco”校で、屋根が一部崩壊。

(Paraguay Business News No.34)

右の資料は、2017年3月7日の新聞記事。7年生（中1）の授業が木の下で行われている写真が掲載されている。一見のどかな様子に映るが、実は校舎の改修が行われず、やむなく屋外で授業をせざるを得ない状況であることを伝えている。（ULTIMA HORA紙）



（４）就学率、識字率

2016年8月5日のLa Nacion紙によると、2015年のパラグアイの児童生徒（6歳から17歳まで）の就学率は、93%となっている。また、同記事によると、15歳以上の識字率は95%となっている。

(<http://www.lanacion.com.py/2016/08/05/>)

別の統計資料では、2010年の就学率が83.49%となっていて、2015年の方が上回っていることが分かる。この数字から、教育環境の改善の成果が少しずつ表れていることがうかがえる。

(<http://www.nationmaster.com/country-info/stats/Education/School-enrollment%2C-primary/%25-net>)

4 算数教育のカリキュラム

初等教育2期（4年～6年）の1週間の標準時数は、右の表のようになっている。これを見ると、平日の5日間で、毎日授業が行われるのがLengua Materna（母国語）とMatemática（算数）であることがわかる。

算数は、1週間に5回で、1回を40分とし、週に200分行うことになっている。これは、全体の16.67%である。つまり、他教科に比べ、算数は母国語（スペイン語）と並んで重要な教科となっていることがうかがえる。

首都アスンシオンから50kmほど離れた地方都市アトゥラ市にある国立校「Escuela Basica No. 387」での6年生の時間割が次のページの資料である。週に29コマあり、算数（Matemática）は、スペイン語（Castellano）、グアラニー語（Guarani）とと

Áreas	Porcentaje	Total Semanal	Total Minutos(**)
Ciencias Naturales	10	3	120
Ciencias Sociales	13,33	4	160
Educación Artística	6,67	2	80
Educación Física	3,33	1	40
Educación para la Salud	6,67	2	80
Lengua Materna	16,67	5	200
Segunda Lengua	13,33	4	160
Matemática	16,67	5	200
Trabajo y Tecnología	6,67	2	80
Desarrollo Personal y Social	6,67	2	80
Orientación Educativa y Vocacional	3,33	1	40
Proyecto Educativo Comunitario	3,33	1	40
Total de Horas	100	30	1.200

(*) La carga horaria propuesta no incluye el tiempo destinado al receso, formaciones de entrada y/o salida.
(**) El tiempo estimado hace referencia a horas cátedras de 40 minutos.

もに毎日行われていることが分かる。

ちなみに、この時間割の学校は、午前から午後まで授業が行われていて、午前で放課の学校にはない自己開発の時間（Desarrollo Personal）や踊り（Danza）の時間などが組み込まれている。

LUNES	MARTES	MIÉRCOLES	JUEVES	VIERNES
Castellano	Castellano	Castellano	Castellano	Castellano
Guaraní	Guaraní	Guaraní	Guaraní	Guaraní
Matemática	Matemática	Matemática	Matemática	Matemática
Ciencias Sociales	Educación Física	Música	Danza	Ciencias Sociales
Trabajo y Tecnología	Salud	Ciencias Naturales	Ciencias Naturales	-----
Desarrollo Personal	Ciencias Naturales	Salud	Ciencias Sociales	-----
-----	-----	Desarrollo Personal	-----	-----

5 算数授業の様子

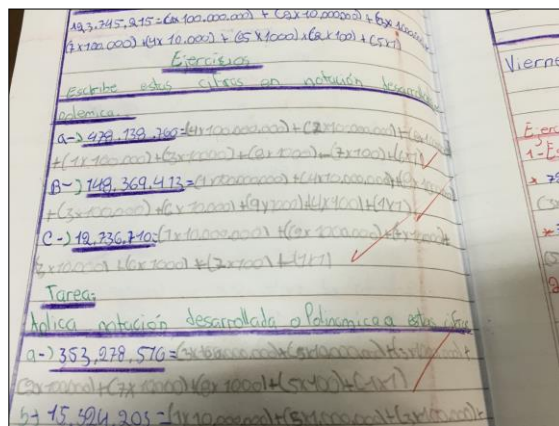
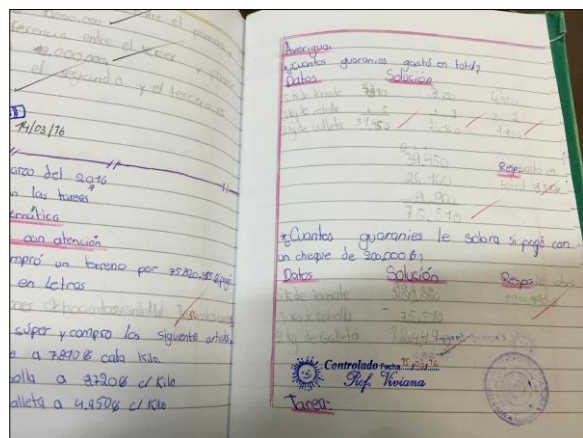
(1) 国立学校の授業の様子

国立学校の場合、授業担当教師が黒板に問題等を書き、それをノートに書き写しながら授業を進めていくというスタイルが一般的である。日本で良く活用されている「計算ドリル」などの問題集は、児童家庭の貧困等の原因で用意ができないのが現状である。また、教育予算の関係でコピー機や印刷機が学校に備わっていないこともあり、教師が問題を板書するしかないわけである。教科書は無償で配布されているが、掲載されている問題数が少ないという問題点もあるようだ。

児童の机は、椅子と一体型が一般的で狭い。したがって、ノートを置くのが精いっぱいである。また、教室には児童用のロッカーがないため、児童の机の周りにカバン等を置くようになっている。



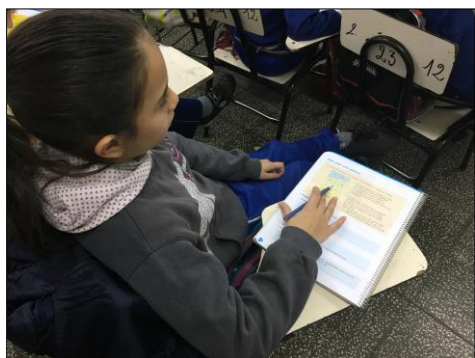
(4年生 3桁×1桁の計算 Escuela Basica No.167)



(ノートの様子：とても丁寧にノート作りをしている印象である。)

(2) 私立学校の授業の様子

私立の学校は、国立学校とは違い授業料の徴収があり設備等も比較的充実している。また、児童の手元にはテキストがあり、国立学校との教育環境の格差がうかがえる。



児童の手元にある「テキスト」。解説や問題が記載されている分、授業の効率が上がる。(NIHON GAKKO)

(3) 青年海外協力隊が派遣されている地方の学校の様子

青年海外協力隊員(算数教育分野)が派遣されている学校を視察した様子である。学校は、首都アスンシオンから約50km東にあるアトゥラ市というところにあり、地方の農村の学校である。周辺の道路は、舗装されているのは主な幹線道路だけであり、その他は土の道のため、雨が降るとぬかるんでしまい、車も容易に走ることができないほどの状態になってしまう。そうになると児童生徒の登校が難しくなり、「雨の日は学校が休みになる」というのが慣例となってしまう。

視察した学校は、Escuela Basica No. 43及びNo.387の2校である。

まず、No.43に派遣されている協力隊員は、算数の学力向上のために、主に関九九の習熟を図ることを目標にして取り組んでいた。それは、小学6年生を修了する児童の約半数は、九九をマスターしていないという現実があるからだ。パラグアイでは、日本のように「ニンガシ、ニサンガロク・・・」というような唱え方がなく、普通に「ドス(2) ポル(×) ドス イグアル(=) クワトロ(4)・・・」と、単に式をそのまま言いながら唱えて覚えている。それは大きな問題ではないが、残念ながら九九をしっかりとマスターするような授業を展開していないというのが大きな原因だという。つまり、授業で「2の段」を扱ったとしても、クラスの児童全員マスターするように時間をかけることなく、「あとは覚えておくようにしなさい」という指示だけで終わってしまうことが多いのだ。



(100ます計算をしている様子)



(答え合わせの様子 協力隊員が一人一人のノートに升目を書いているのがわかる。)

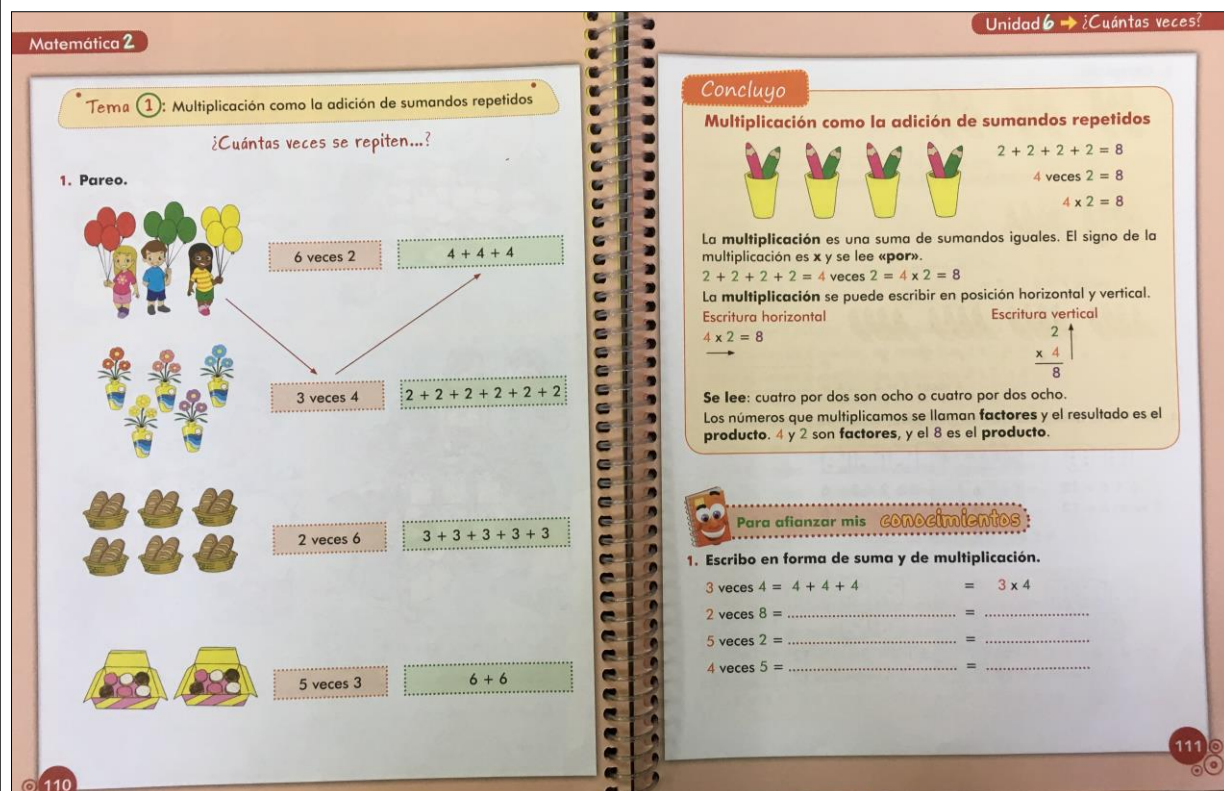
各学年とも根気強く「九九」をマスターさせるべく、何度も唱えたり、100ます計算をしたりして、積み重ねをはかったことで、実感として九九を覚える児童が増えてきたということである。「100ます計算大会」を開催することで意識を高めることもできたようである。しかし、九九をがんばるのは授業の時間だけで、家庭で練習することは少なく、定着するのには、今後も継続が必要だという話をしていた。



(段ボールで作ったフラッシュカードでの授業)

【かけ算の学習について①】

パラグアイのカリキュラムでは、2年生でかけ算の考え方を学習し、3年生になってから九九の学習をするようになっている。私が地元の本屋で購入したテキストでは、2の段、5の段、10の段、1の段、4の段、8の段、3の段、6の段、9の段、7の段の順番に学習を進めるようになっている。



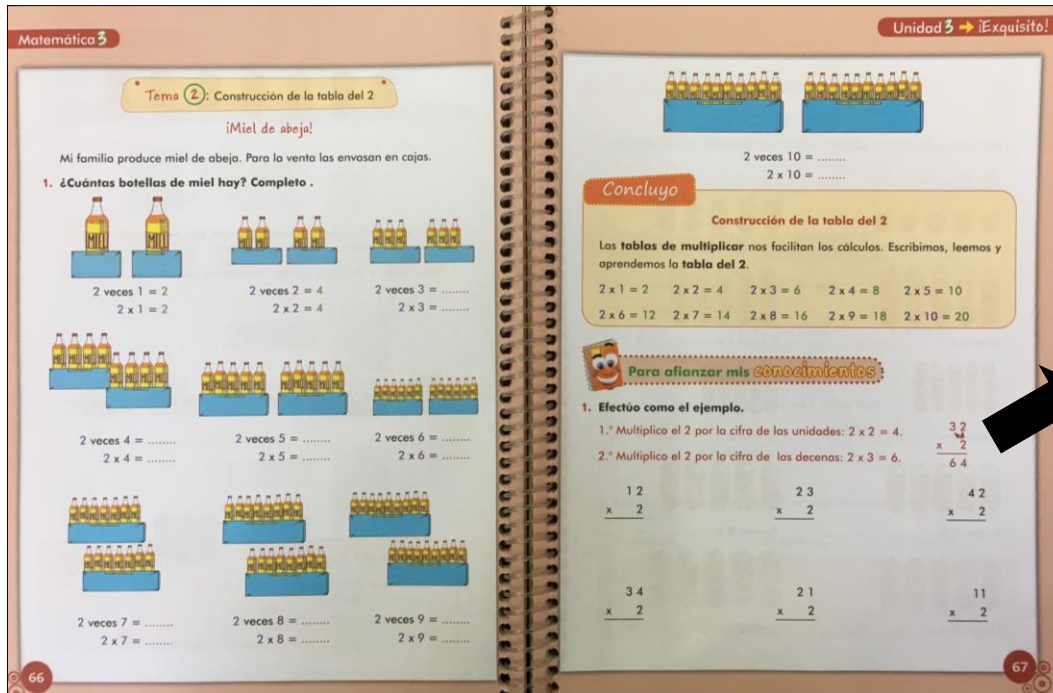
上の資料は、2年生のテキストである。かけ算の概念である、「いくつ」が「いくつ分」という考え方を導入としている。例えば、4つの風船をもっている子供が3人いる絵を、式に導いている部分では、 $3 \text{ veces } 4 \Rightarrow 4 + 4 + 4$ とし、右のページで、 $3 \text{ veces } 4 = 4 + 4 + 4 = 3 \times 4$ と導いている。つまり、 3×4 は、4が3つ分と教えている。(日本の「式」の考え方とは逆になっている。)

2年生では、このように、「いくつ」が「いくつ分」という考え方を学習するのみで、九九を覚えるところまではいかない。2年生でかけ算の概念をしっかりとマスターさせる目的があると考えられる。

ただし、このテキストでは、8の段が終わったあとに、割り算の概念の学習が入っている。このあたりの算数の単元構成には、少々疑問を抱いてしまう。

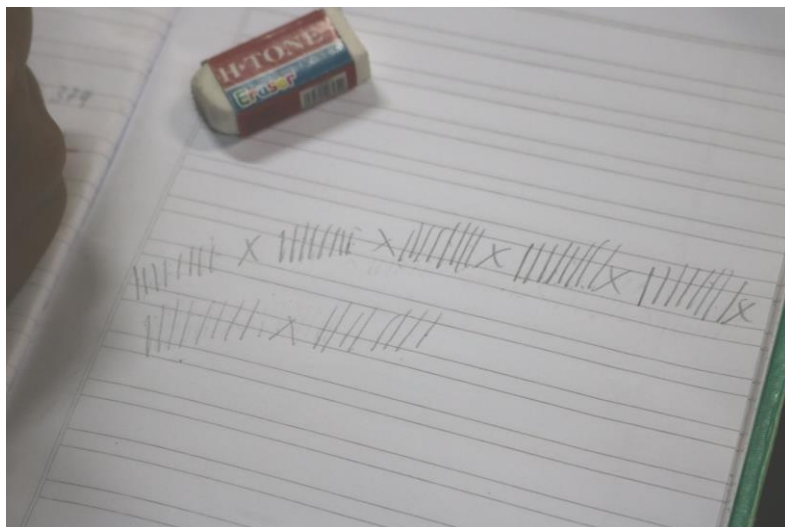
【かけ算の学習について②】

3年生のテキストを見ると、2年生の復習として、「いくつがいくつ分」のページがあり、そして、次のページに、2の段の考え方が出てくる。



テキストを見るとわかるように、九九を唱えなくても、絵を見て「ビンの本数」を数えることで答えが出せるようになっている。また、右のページでは、すぐに2桁×1桁の筆算が登場している。(拡大している部分) 日本では2桁×1桁の筆算は6時間扱いであることを考えると「やりかただけを教え込む」流れになっていることがわかる。

都市部の国立校の視察で小4の算数の授業を参観したとき、3桁×1桁の筆算の問題をやっていた。ある子のノートを見ると下の写真のように、棒を書き並べながら計算をしていた。おそらくこの子は

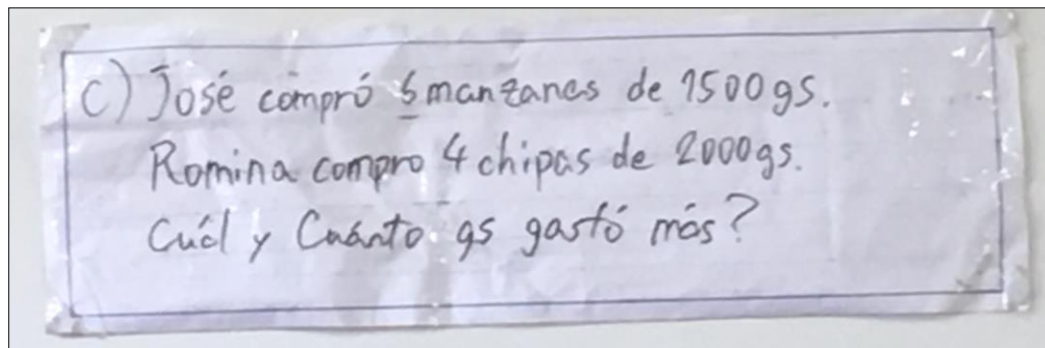


8×7 (パラグアイでは7×8) の答えを出すために、8本の棒を7セット書いて、そして、その棒の数をいちいち数えて答えを出しているのだろう。確かに、2年生で学習した基本がしっかりと身に付いているといえはその通りだが、九九を覚えていないために、1問を解くのにとても時間がかかってしまう。

実は、この授業で担任の先生の代わりに、できた子から「丸つけ」をさせてもらったのだが、3桁×1桁の筆算10問を全問正解していたのは一人もおらず、逆に半分以上間違えている子がほとんどであった。

もう一つの学校Escuela BasicaNo.387に派遣されている協力隊員は、テスト結果をもとに児童の学力を把握しながら、その学力に見合ったレベルで授業をして、基礎学力の定着を図る、ということを目指に実践されていた。

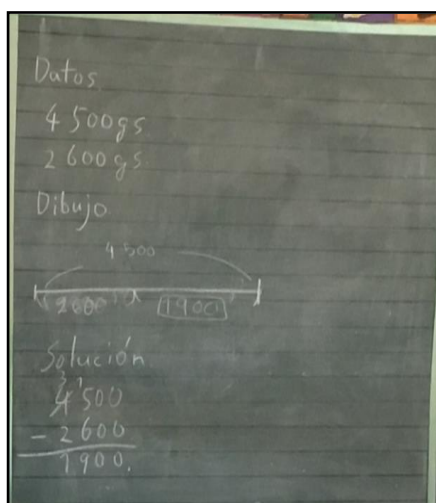
6年生の算数の授業では、本来のカリキュラムで行わなければならない単元内容ではなく、3、4年生レベルの課題を与え、ていねいに授業を展開していた。



※協力隊員が作成した問題

問題「ホセさんは、7500グアラニーのリンゴを5つ買いました。ロミナさんは、2000グアラニーのチパを4つ買いました。どちらがどれだけ高いですか。」

6年生で学習する課題ではないが、このレベルまで落として授業をしなければならないという実態なのである。



左の写真は、もうひとつ前の問題での板書の様子である。まず問題に書かれている情報 (Datos) は何かを確認する。そして、線分図に表す。(Dibujo)

最後に、計算をする、(Solucion) という段階で考えさせている。

「教え込む」のではなく、考え方をしっかりと定着させようとしていることがわかる。



(机間指導をしながら丁寧に教えている)

派遣されている協力隊員は、授業を行う以外にも、授業改善のために現地の先生方に対して授業の仕方や教材開発、教材制作などの指導にもあたっていた。



(4) 算数の学力調査の様子

もう一つ、協力隊員が派遣されている学校に、アスンシオン校外にある「NIHON GAKKO」という私立校がある。（日本の教育に感銘を受けたパラグアイ人が開校した学校である。）その学校で協力隊員が作成し実施した算数の学力調査がある。その隊員は児童の実態を把握するために、全学年に対してテストを実施した。その中で、6年生の様子について紹介したい。

6年生の問題は、大問題として「計算」「量と測定」「図形」「文章題」があり、すべての問題は、授業で使われていたテキストから出題している。つまり、しっかりと学習したことが定着されていればある程度の点数は取れるはずである。

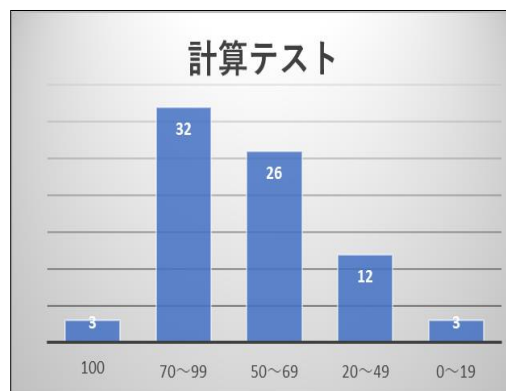
結果についてだが、ここでは「計算問題」のみ紹介をしたい。

問題は全部で12問。内容は、たし算、ひき算、かけ算、割り算、小数の計算、分数の計算である。

結果は次の通り。受験者は6年生76人。

100点3人。70点以上が32人。50点以上が26人。20点以上は12人、20点未満は3人であった。（右のグラフ）

この結果から、都市部の私立学校の6年生でも全体的に計算力は高いものではないことがうかがえる。（平均点は60.13点）



（余談となってしまうが、同じ問題をアトゥラ市のEscuela Basica No.387の6年生にも実施しようとしたのだが、現地の先生がこの問題を見た時点で、「この問題は、この児童には難しすぎる」ということで、実施することができなかった。）

（実際のテスト問題）

El examen para 6 grado

Nombre _____

1. Calcula estas problemas

a. $6865 + 1799$	b. $7002 - 1637$	c. 566×678
d. $2862 : 18$	e. $10,44 : 18$	f. $13,25 \times 8$
g. $121,2 - 54,77$	h. $17,4 + 28$	i. $1\frac{2}{7} + \frac{5}{14}$
j. $\frac{2}{5} : \frac{1}{5}$	k. $1\frac{1}{4} \times \frac{1}{2}$	l. $3\frac{1}{3} - \frac{5}{9}$

(5) 考察

国立学校の視察を通して感じられたことは、まず、授業がほとんど「講義形式」であり、児童が思考する場面が少ないということである。一般的に日本で行われているような、課題に対して考えを巡らせながら意見を出し合い、解決方法を見出していくという授業はほとんど見ることはできなかった。また、協力隊員の派遣されている学校の様子からも分かるように、その学年の単元ごとに身に付けさせなければならない学力が定着されないまま授業が進んでいるという実態である。このような課題の根底には、授業日数に対して、教えなければならない内容の量が多いという問題があると考えられる。逆に言えば、授業時数が足りないということになる。教師は、2月から11月までの約9か月の間に、その学年の内容を終わらせなければならない。年間の授業日数は、単純計算で約180日間だが、天候によって授業ができなかったり、学校行事などで授業が削られてしまったりすることが大いにある。そうすると、時間的な余裕がなくなり児童の学力の定着よりも、まずは「終わらせる」ことを優先してしまっているのではないかと想像する。じっくりと考え、話し合いをしながら解決方法を見出していくような授業ができない理由がここにあると考える。

パラグアイの児童の学力の向上を考えると、授業日数、教科の授業時数をしっかりと確保するような手立てが求められる。

6 算数に対する意識調査

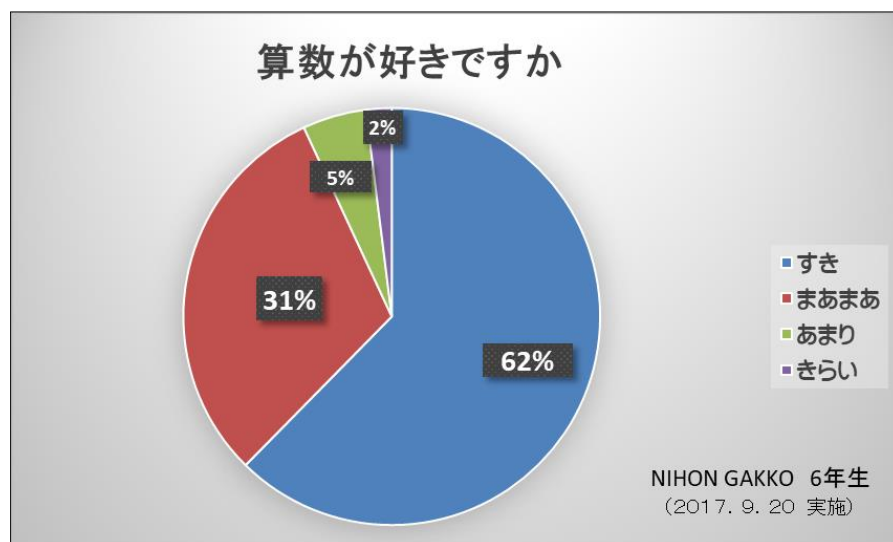
パラグアイの算数教育についての課題が浮き彫りになったが、このような実態の中、児童は算数に対してどのような意識をもっているのか、ということに関心をもつようになった。そこで、以下のようなアンケートを、都市部の私立校、地方の国立校に実施してみた。

(1) アンケートの項目

- ①あなたは、算数が好きですか。
- ②なぜ、そう思いますか。
- ③算数は、将来役に立つと思いますか。
- ④どんなときに役に立ちますか。

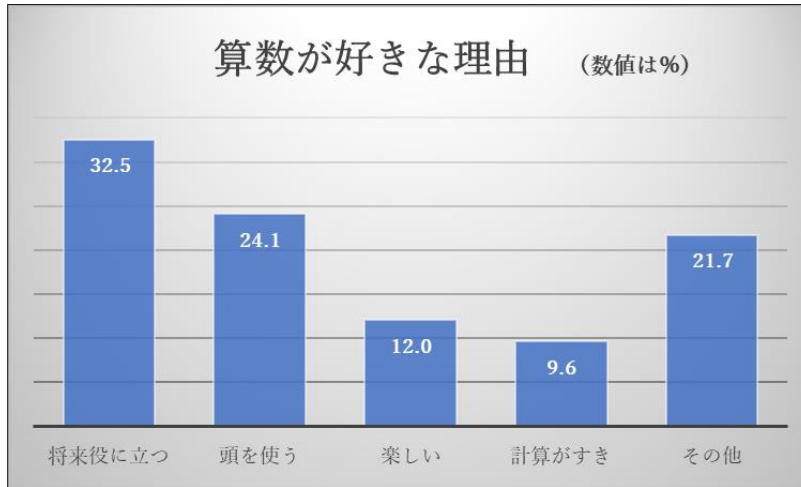
(2) 都市部の私立校の結果 (ニホンガッコウ 6年生102人)

- ①算数は好きですか。



好き	: 62%
まあまあ好き	: 31%
あまり好きではない	: 5%
きらい	: 2%

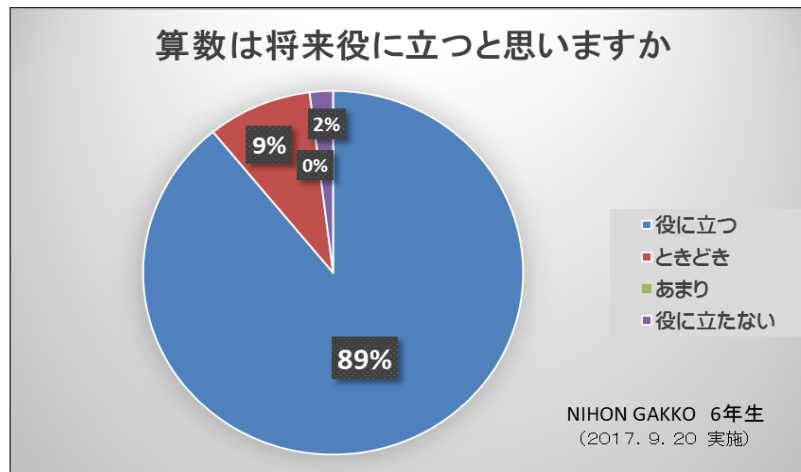
②算数が好きな理由。



※「あまり好きではない」「嫌い」と回答した子の理由

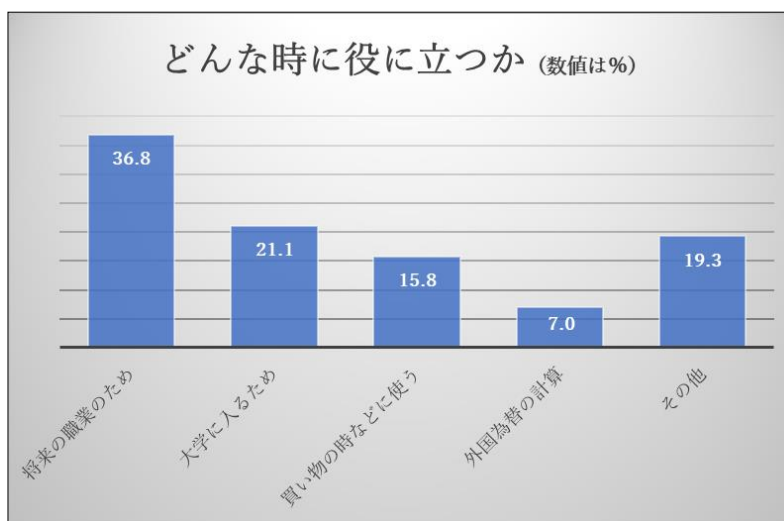
- ・ほとんど何もできない
- ・別に役に立つとは思わない
- ・難しいし興味がない
- ・算数はわからない
- ・混乱する
- ・勉強することが多い

③算数は将来役に立つと思いますか。



役に立つ : 89%
時々役に立つ : 9%
役に立たない : 2%

④どんな時に役に立つと思いますか。 (延べ回答数：114)



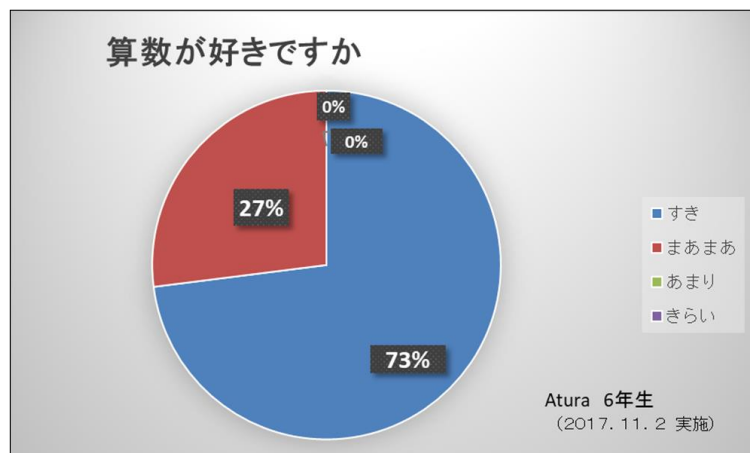
将来の職業のため : 36.8%
大学に入るため : 21.1%
買い物など : 15.8%
外国為替の計算 : 7%
その他 : 19.3%

※その他の意見

- ・自分の子供に教える
- ・物事が正確にできる
など

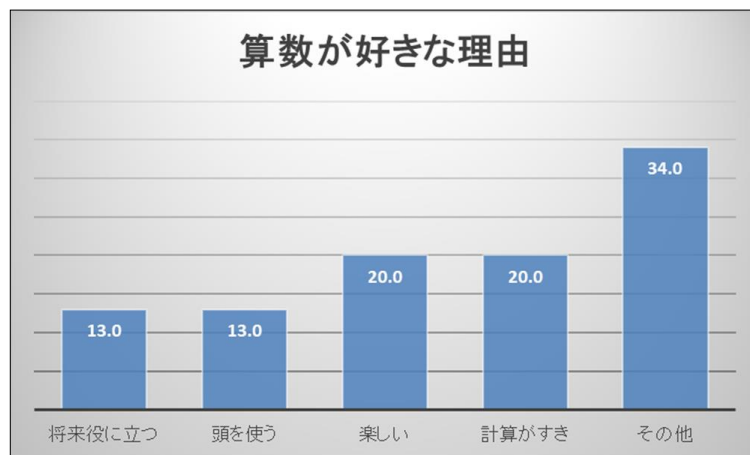
(3) 地方の国立学校の結果 (Escuela BasicaNo.387 6年生15人)

①算数は好きですか。



好き : 73%
 まあまあ好き : 27%
 あまり好きではない : 0%
 きらい : 0%

②算数が好きな理由

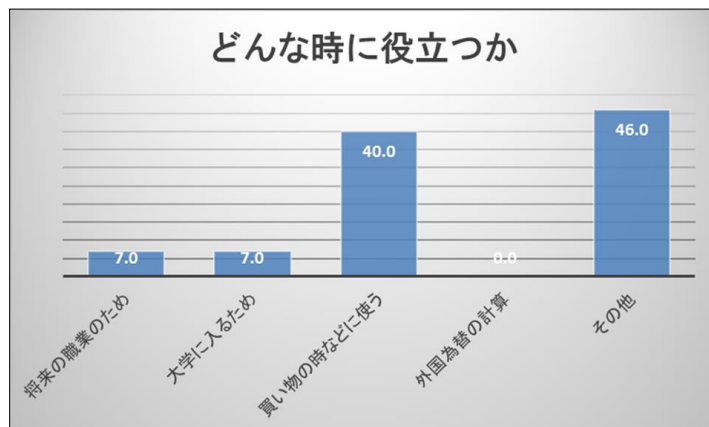


その他の意見
 ・買い物するとき使う
 ・いろいろ覚えられる
 など

③算数は将来役に立つと思いますか。

○「役に立つ」が100%

④どんな時に役に立つと思いますか。



将来の職業のため : 7%
 大学に入るため : 7%
 買い物など : 40%
 その他 : 46%

(4) 考察

都市部の私立学校（ニホンガッコウ）の6年生も地方の国立学校（No.387校）の6年生も、総じて「算数が好き」と感じていることが分かった。ニホンガッコウでは93%、No.387校では、実に全員が好きという結果には驚いた。日本の小学校6年生に同じアンケートを取った場合、想像でしかないのだがこれまでの経験から、これだけの高い数値は出ないだろう。学力的には高くないという実態から、「算数嫌い」がもっといるのではないかと思ったのだが、この結果を見て、パラグアイの独特の「文化」があるのだろうと思わざるを得ない。日本の児童が算数嫌いになる原因のひとつは、「わからないから」「難しいから」という理由である。パラグアイの児童の中にも「わからない」「難しい」と思う児童は多いだろう。しかし嫌いにはならないのはなぜか。別の角度からの分析も必要になると考える。

将来役に立つか、という質問に対して、「役に立つ」「時々役に立つ」を合わせた数字を見ると、ほぼ全員がそう思っている。算数が自分の将来や生活に密接に関係しているのだろう。ニホンガッコウのアンケートを見ると、「将来の職業や進学のために役に立つ」と回答している子が多い。6年生のこの段階においてしっかりと人生設計ができていることがうかがえる。また、「外国為替の計算」という回答があったことに、隣国と接している国ならではの回答だと感じた。日本の6年生からは出てこない回答だろう。また、No.387校の児童の回答を見ると、地方の国立学校の児童らしく、役に立つ場面は「買い物」となっている。やはり、算数が生活に密着していることがうかがえる。日本の児童は、算数を生活に密着させて考えているのかどうか、というのは、算数科の課題でもある。どの単位においても、どんな場面でこの学習が生かされるのか、ということを考えさせる必要があることは、以前から指摘されていることだ。その点において、算数が生活と密接に関係しているパラグアイの児童の考え方や感性を私たちは見習うべきであると感じる。

7 パラグアイの児童の自尊感情

アスンシオン日本人学校では、生徒指導の一環として児童生徒の自尊感情を測定するために「自尊感情測定尺度（東京都版）自己評価シート」を活用している。

http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h23/materials/h23_mat01c_02.pdf

このアンケートを、パラグアイの児童に実施したらどのような結果が得られるのかと思い、アトゥラ市の国立学校の6年生及び都市部の私立学校の6年生に実施した。以下の表がその結果である。

自尊感情測定尺度（東京都教職員研修センター）	4	3	2	1		4	3	2	1
1 私は今の自分に満足している	97.8	2.2	0.0	0.0		86.3	11.8	0.0	2.0
2 人の意見を素直に聞くことができる	51.1	24.4	13.3	11.1		57.8	32.4	5.9	3.9
3 人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる	51.1	31.1	8.9	8.9		51.0	25.5	4.9	18.6
4 私は自分のことが好きだ	88.9	2.2	4.4	4.4		91.2	4.9	1.0	2.9
5 私は人のために力を尽くしたい	73.3	13.3	4.4	8.9		64.7	22.5	6.9	5.9
6 自分の中には様々な可能性がある	75.6	15.6	2.2	6.7		82.4	13.7	2.0	2.0
7 自分はダメな人間だと思うことがある	20.0	20.0	8.9	51.1		18.6	17.6	9.8	53.9
8 私は他の人の気持ちになることができる	44.4	20.0	15.6	20.0		47.1	34.3	8.8	9.8
9 私は自分の判断や行動を信じていることができる	82.2	11.1	0.0	6.7		73.5	21.6	2.0	2.9
10 私は自分という存在を大切に思える	91.1	6.7	0.0	2.2		85.3	10.8	1.0	2.0
11 私には自分のことを理解してくれる人がいる	84.4	8.9	2.2	4.4		85.3	6.9	3.9	3.9
12 私は自分の長所も短所もよくわかっている	84.4	8.9	2.2	4.4		83.3	12.7	2.9	1.0
13 私は今の自分は嫌いだ	44.4	2.2	0.0	53.3		34.3	8.8	6.9	50.0
14 人に迷惑がからないういったん決めたことは責任をもって取り組む	66.7	22.2	4.4	6.7		55.9	30.4	4.9	8.8
15 私は誰にも負けないものがある	42.2	24.4	8.9	24.4		51.0	25.5	4.9	18.6
16 自分にはよいところがある	66.7	22.2	4.4	6.7		78.4	19.6	2.0	0.0
17 自分を見守ってくれる周りの人に感謝している	93.3	2.2	2.2	2.2		96.1	3.9	0.0	0.0
18 私は自分のことは自分で決めたいと思う	75.6	11.1	6.7	6.7		61.8	28.4	1.0	8.8
19 自分は誰の役に立っていないと思う	22.2	4.4	11.1	62.2		7.8	12.7	12.7	66.7
20 私には自分のことを必要としてくれる人がいる	97.8	2.2	0.0	0.0		91.2	7.8	0.0	1.0
21 私は自分の個性を大事にしたい	95.6	2.2	2.2	0.0		93.1	6.9	0.0	0.0
22 私は人と同じくらいの価値のある人間である	84.4	6.7	6.7	2.2		85.3	5.9	2.9	5.9
回答数45 数値は%						回答数102			
ATURA ESUCUERA No.43/No.387（2校合計）					【Atura Paraguay】	NIHON GAKKO 【Asuncion Paraguay】			

地方の国立校と都市部の私立校と2校の様子を並べて比較しようとしたのだが、結果的には、ほとんど同じ数値であった。したがって、調査対象の人数は少ないものの、パラグアイの児童の内面的な心情は、都市部も地方もほとんど変わらないということが言える。実施前に、日本の児童に比べ自尊感情は高いだろうと予想をしていたが、その予想をはるかに上回る数値に驚かされた。

まず、項目1「自分に満足している」については、ほとんどの児童が満足していることが分かる。また、項目4「自分のことが好きだ」についても、90%以上の子が肯定的回答をしている。その回答の背景となるのが、項目20「自分のことを必要としてくれる人がある」だと考える。肯定的回答もほぼ100%となっている。このことから、パラグアイの児童は、自分の存在を認めてもらい、自分の居場所がしっかりとあることがわかる。この安心感が、日々の生活の原動力となっているのだと感じる。

先に述べた、「算数に対する意識調査」の結果において、算数の学力と算数が好きと答える児童の数のギャップは、この自尊感情の高さなどからも説明できるのではないだろうか。おそらく、勉強ができるかできないかという視点で保護者や周囲から見られるのではなく、常に肯定的な評価を得ているのではないかと考えられる。

日本の児童との比較はしないにしても、日本の児童もこのような明るく前向きな心情をもつ子が多くいてほしいものである。ただ、単純に比較することができないのも事実である。それは、国の情勢、文化や歴史、宗教観などが大きく異なるからである。特に、カトリック信者の多いパラグアイでは、その宗教観から派生している生活環境、家庭環境が大きく影響していると考えられる。また、ラテンアメリカ独特の感性もあるだろう。

8 おわりに

パラグアイの算数教育をテーマに、現地の学校を視察したり、資料を集めて分析をしたりすることで得られたことは多くあった。

パラグアイの初等教育は、世界経済フォーラム（WEF）が測定したパラメータにおいて、南米最下位となっている。（Paraguay Business News No. 35）また、「教育とともに」財団（Juntos por la Educacion）のR. Cano氏によると、100人が初等教育に入学したとして、そのうちの35人が中等教育を終えることができ、10人が高等教育に進み、最後に1人が高等教育を終える、という現状だそうだ。教育に関する資料を集めてみると、パラグアイの教育は、改善しなければならない部分は多くあると言わざるを得ない。

しかし、算数についてのアンケートや自尊感情のアンケートから察するに、パラグアイの児童はとてもポジティブで未来をしっかりと見据えていることがうかがえる。ということは、教育制度や国による教育に対する様々な援助がもっと改善されれば、将来的にパラグアイのさらなる発展は大いに期待できるのではないだろうか。今後のパラグアイの教育改革に期待したいところである。

今回の調査研究で得られたことを、帰国後の教育にしっかりと生かしていきたい。

最後に、この報告を作成するにあたり、「Paraguay Business News」編集長の立川巧雪氏、青年海外協力隊の三井久美子氏、田部信宏氏、西野宏明氏には、資料の提供、児童へのアンケートの実施など、多くの場面でご協力をいただいた。心より感謝申し上げたい。

【参考資料】

日本国外務省HP

パラグアイ教育省HP

Paraguay Business News

ULTIMA HORA紙

abc紙

児童用算数テキスト（ATLAS出版）